研究ノート

第１次募集と第２次募集の合格者の共通第１次学力試験の成績比較

研究部教授　清　水　留三郎
（情報処理研究部門）

国公立大学の入学者選抜が，国立大学協会の特別委員会による精力的な改善調査に基づいて，昭和54年度から共通第１次学力試験と第２次試験の組合わせによって行われるようになっている。それと同時に，国立大学の入学者選抜における１期校と２期校の制度に代わって，公立大学も含めた第２次募集の制度が導入されている。志願者に複数の機会を与える上で，第２次募集と共通第１次学力試験の組合せは，つぎのような点で機能の合理化に貢献している。１期校と２期校の制度では，どの志願者も併願できたため，１期校と２期校に同時に合格し，他人の機会を奪うことにつながる者がいたりして，本来の目的を達成するのに困難があった。それに対して第２次募集の制度では，第１次募集の選抜にもれた者しか出願できない上に，共通第１次学力試験の成績も既に利用可能になっていることが，選抜を短い期間で円滑に進めるのに役立っている。

昭和57年度から高等学校の教育課程が改正されたのに伴って，昭和60年度から大学の入学者選抜も改まる。この機会に過去の第２次募集の状況を振り返ってみることにする。第２次募集の合格者[1]の数は昭和59年度においておよそ1700人であるが，これは共通第１次学力試験に参加している大学の入学者数約10万人の２％にも満たない。志願者に複数の機会を与える上では，まだ程遠いと言わざるを得ないであろう。第２次募集には，予め定員を留保して行うものと，第１次募集で欠員が生じた場合に，それを補充するために行うものの２種類がある。昭和59年度における第２次募集の合格者数では，欠員補充によるものは94人に過ぎず，大部分は定員留保によっている。

学部系統別に見た第２次募集の合格者数の推移は**第１表**のようになっている。最初の昭和54年度は，大学入試セ

1）本稿では，合格者の中で入学を辞退したことが大学入試センターに連絡された者は除いている。

第1表　第2次募集の合格者数の推移

系統＼年度	55	56	57	58	59
経済	352	392	387	397	597
工	419	320	408	407	460
理	18	15	50	58	105
農	77	69	88	38	92
法	—	—	53	75	72
教員養成	77	26	38	41	68
鉱山	58	77	57	58	65
医	—	—	30	29	53
水産	—	—	—	—	38
薬	31	32	32	29	28
外国語	—	—	—	—	26
外国語第二部	63	65	—	—	40
工第二部	28	42	23	41	37
法第二部	30	25	30	30	30
商船	31	—	—	—	—
家政	4	—	—	—	—
合計	1,188	1,063	1,196	1,203	1,711

ンターに連絡を受けることになった情報が合否だけで，合格しても入学を辞退した者が不明なため，集計できなかった。第2次募集の合格者数は，昭和58年度まで1200人程度と変化が少なかったが，昭和59年度にそれまでのおよそ4割500人増した。

昭和59年度の第2次募集実施大学を系統別に見ると**第2表**のようになる。昭和59年度における増員が，主として新規募集大学によっている系統は，経済，農，教員養成，医，水産，外国語である。

大学にとって第2次募集による入学者の選抜は，第1次募集の場合より短い期間で実施しなければならない困難を伴う。それにも係わらず第2次募集を行う理由は，第1次募集だけによるより高い学力の入学者を得る期待が主であろう。この意味で，第1次募集と第2次募集の合格者の共通第1次学力試験成績の比較に関心があろう。また，第2次募集を実施する大学が増えた場合の推移の予測もそうであろう。昭和58年度と昭和59年度の比較はその推移を示唆する情報になろう。

第2表　昭和59年度第2次募集実施大学

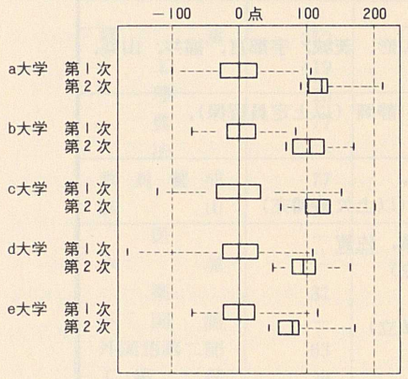
系統	実施大学
経済	小樽商科，福島，滋賀，山口，香川，高知，佐賀，北九州（公立）
工	室蘭工業，岩手，山形，茨城，宇都宮，福井，山梨，静岡，九州工業
理	山形，茨城，富山，静岡（以上定員留保），島根（欠員補充）
教員養成	和歌山（定員留保），三重，香川，長崎（以上欠員補充）
農	岩手，宇都宮，三重，佐賀
法	香川，北九州（公立）
鉱山	秋田
医	鳥取，産業医科（私立）
水産	長崎
薬	富山医科薬科
外国語	東京外国語，大阪外国語
外国語第二部	神戸市外国語（公立　欠員補充）
工第二部	九州工業
法第二部	広島

（注）特に記してない場合は定員留保による。また，下線は昭和58年度は募集しなかった大学を示す。

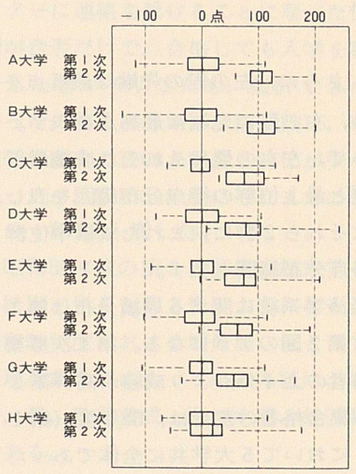
そこで，多数の大学が第2次募集を実施している系統を選んで，昭和58年度と昭和59年度における成績の分布を見よう。分布の比較を便利にするため，成績順に並べた合格者群を人数で4等分した場合境界に位置する者の得点（これを4分点と言う）を，箱と髭の形で図示する。箱の左辺は下4分点を表し，右辺は上4分点を表す。また，箱の内部の仕切辺は，中央点を表すのが慣例であるが，ここでは平均点を表す。さらに，左の髭の先端は最低点を表し，右の髭の先端は最高点を表す。従って，左右の髭はそれぞれ成績最下位群と最上位群の得点分布範囲を表し，箱はそれら2群に挟まれた成績中位群の得点分布範囲を表す。

経済学系統に関する成績分布は**第1図**と**第2図**のようになる。第1次募集合格者の上4分点より成績が高い第2次募集合格者の割合は，58年度（**第1図**）において5大学共に全体であった

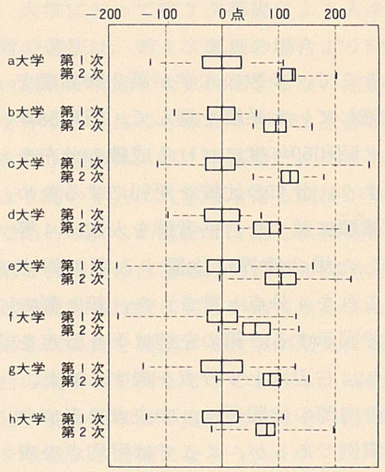
第１図　第１次募集と第２次募集の合格者の成績分布
（昭和58年度経済学系統）



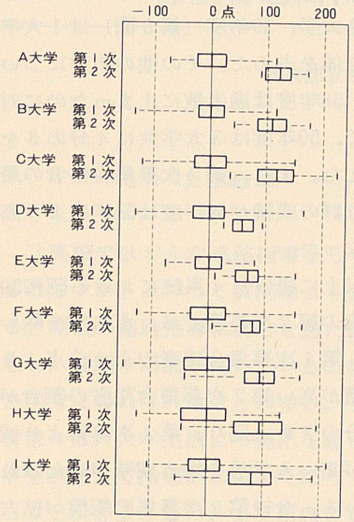
第２図　第１次募集と第２次募集の合格者の成績分布
（昭和59年度経済学系統）



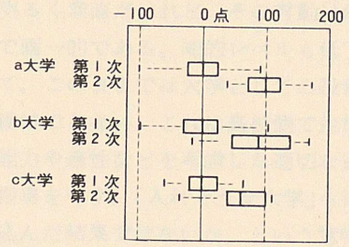
第３図　第１次募集と第２次募集の合格者の成績分布
（昭和58年度工学系統）



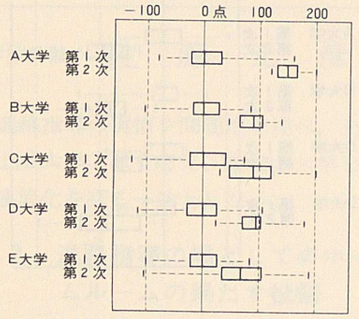
第４図　第１次募集と第２次募集の合格者の成績分布
（昭和59年度工学系統）



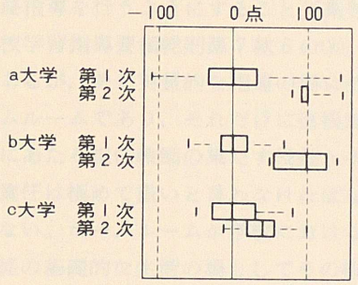
第５図　第１次募集と第２次募集の合格者の成績分布
（昭和58年度理学系統）



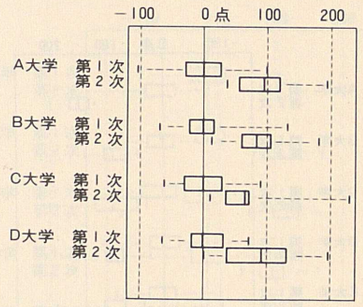
第６図　第１次募集と第２次募集の合格者の成績分布
（昭和59年度理学系統）



第７図　第１次募集と第２次募集の合格者の成績分布
（昭和58年度農学系統）



第８図　第１次募集と第２次募集の合格者の成績分布
（昭和59年度農学系統）



募集合格者の割合は，58年度（第５図）は１大学，59年度（第６図）は２大学で全体を占め，両年度共に他大学で４分の３を上回った。

農学系統に関する成績分布は第７図と第８図のようになる。第１次募集合格者の上４分点より成績が高い第２次募集合格者の割合は，58年度（第７図）は２大学，59年度（第８図）は１大学で全体を占めた。その他の大学について，58年度は過半数に止まったのに対して，59年度は３大学共に４分の３を越えた。また，第２次募集合格者の最上位群の成績が59年度は58年度より高くなった。

以上に掲げた４系統における昭和59年度の第２次募集では，１大学を除いて，第１次募集合格者の上４分点より成績が高い第２次募集合格者の割合が４分の３を上回り，第１次募集より成績が高い入学者を得る期待が満たされている。今後第２次募集の規模が拡大されたとしても，この状態が少なくても当面は持続すると推測される。